

[自然・動植物]

地形／地質／気候／動物／植物

自然・ 動植物

地形

加賀市は、石川県の最西南端に位置し、南西方は福井県、東方は小松市に接し、北西に走る海岸線は日本海に面しています。加賀市の周囲は98.5kmで、このうち16.5kmが日本海と接する海岸線となっています。市の面積は306km²で、このうち田畑である農地が約35.3km²、山林が211.8km²を占めています。

加賀市の地形は大きくは低地、台地、丘陵山地の3つに大別されます。低地の中心は江沼平野です。約6000年前の縄文時代は今より海面が2～3m高かったといわれ（縄文海進）、江沼平野も、この時代は入り江や浅い海でした。その後、大聖寺川や動橋川などによって運ばれてきた土や砂が堆積して平野になったもので、こうした平野は「沖積平野」と呼ばれています。柴山潟、木場潟、今江潟などは、土や砂が堆積せずに残った部分で、これらの湖は「海跡湖」と呼ばれています。

また、低地の北側は日本海に面し、江沼砂丘と呼ばれる一帯で、第四紀完新世に堆積した砂層が主体となった土壌が現在の片野から塩屋近辺まで見られます。

台地部分は、海拔20～60メートルの緩やかな起伏をともなった段丘で、片野町から黒崎町・橋立町にかけての橋立台地では海触崖特有の海岸地形を形成しています。また、大聖寺川や動橋川の中流域付近では河岸段丘が発達しています。

一方、台地から海拔100メートル以下の山間部は、江沼丘陵と呼ばれるところで、なだらかな起伏や丘が続く地形となっています。市の南側一帯は加賀山地と呼ばれているところで、大日山を頂点にして、白山から続く1000m級の山々が連なり急峻な地形が広がっています。加賀市の面積のおよそ7割近くが、こうした丘陵や山地が占めています。



江沼平野から山並みの遠景

えぬまさんざん 江沼三山

加賀市から日本三名山のひとつ、霊峰白山を仰ぎ、その右側、西方に眼をうつすと、「山中・大日山県立自然公園」に指定されている「大日山」が見えます。大日山は、福井県勝山市と石川県の小松市、加賀市にまたがる標高1368mの山です。その頂上は加賀市と小

松市の境界に位置するところとなっています。山名は大日だいにち如来によらい まつを祀ったことに由来しています。中腹から山頂にかけてはブナの自然林が広がり、春には地表にカタクリなどの花を見ることができます。

大日山からさらに手前 10kmほど離れたところに富士山の山容に似た山があります。標高 942mの富士写ヶ岳ふじしゃがだけです。毎年 5月初旬、中腹から山頂にかけてシャクナゲの花を見ることができます。一方、加賀市東谷口と小松市滝ヶ原町との境界には標高 478mの「鞍掛山」くらかけやまがあります。2つのコブをもち、馬の鞍の形に似ているためにこの名がついたといわれています。古くより日本海を往来する船の目印にもなっていたために、「舟見山」ふなみやまとも呼ばれていました。

この大日山・富士写ヶ岳・鞍掛山は、加賀・江沼の人々が、古来より特に親しんできたことから「江沼三山」と呼ばれています。

2 大かせん河川

当市には、大聖寺川だいしょうじと動橋川いぶのはしの 2大河川があります。大聖



大聖寺川（黒瀬町付近）

寺川は大日山を源流とし、全長 38.0km、県内では手取川てとりがわ・梯川かはしがわに次ぐ 3 番目に長い川となっています。山中温泉の溪谷から江沼平野を流れ、大聖寺の市街地を通過して、塩屋町から日本海に注いでいます。蛇行した形状のため、古来よりたびたび氾濫はんらんを起こしてきた歴史をもっています。昭和 8 年から始められた河川改修工事は、昭和 61 年の激甚災害特別事業までを含めると、あしかけ 50 年という長い年月をかけて治水工事が行われてきました。昭和 40 年には我谷ダムが、平成 18 年には九谷ダムが完成したこともあり、近年、大聖寺では水害みづがたにに遭うことはほとんどなくなりました。一方、動橋川は、同じく大日山を源流とし、全長 20.4km、中流域しじゅうくいんで四十九院川と合流し、塔尾町たのおから二子塚町ふたごづか、動橋町などを通り、最下流で中島町から柴山湯しばやまゆに注いでいます。



大日山



富士写ヶ岳



鞍掛山



動橋川（勅使町付近）

柴山潟

柴山潟は市の東北部に位置する、面積約 1.7km²、周囲約 6.2kmの小さな湖です。「越前加賀海岸国定公園」に指定されており、今江潟、木場潟とともに「加賀三湖」と呼ばれています。柴山潟はもともと面積は現在の約 3 倍の 5.45km²あり、その水は串川から今江潟を経て、梯川へ注いでいました。しかし、昭和 29 年（1954）、国営加賀三湖干拓建設事業によりその 3 分の 2 が埋められ水田に利用されました。また新堀川が篠原海岸に向かって掘削され、日本海へ直接注ぐように改修されました。その後、柴山潟内に締切り堤防が築かれ、昭和 44（1969）年に干拓事業は完成しました。海水面との高低差がきわめて小さいため、海へと流出する新堀川には防潮水門が設置され逆流を防いでいます。



上空から見る柴山潟

海岸部の特色



片野海岸

加賀市の海岸部から福井県敦賀市の海岸部までのおおよそ 100kmの海岸線は、昭和 43 年（1968）に「越前加賀海岸国定公園」に指定され、貴重な自然資源が多く残されています。特に、この間における加賀市の海岸部は、柴山潟をはじめ、尼御前岬や加佐ノ岬、鹿島の森などの景勝地をはじめ、ラムサール条約登録湿地の片野鴨池など貴重な自然資源が数多く残っています。また、塩屋海岸から片野海岸

にかけての砂丘地には貴重な海浜植物を見ることができます。

一方、北前船で栄えた橋立、塩屋、瀬越の 3 町は、江戸時代から明治時代にかけて、船主や船頭を輩出しました。特に、橋立町は、往時の船主邸や高く積まれた石垣などにその面影を見ることができ、赤瓦の船主集落として、平成 17 年（2005）に国の重要伝統的建造物群に指定されました。

山間部の特色

当市の山間部に位置する山中温泉とその背後の富士写ヶ岳や大日山などを含む 2,576ha は、「山中・大日山県立自然公園」に指定されています。この大日山の麓、大聖寺川上流域に位置する西谷地区には、真砂・九谷・大内など 13 町がありましたが、その多くが我谷ダムや九谷ダムの開発のために廃村となっています。



東谷地区（大土町）

一方、動橋川の上流域に位置する東谷地区は、四十九院・滝・中津原など 9 町で構成されていますが、特に、動橋川の最上流域から杉の水川流

域にかけて点在する、^{おおづち}大土・^{いまだち}今立・^{あらたに}荒谷・^{すぎのみず}杉水の4町では、農業や炭焼きを主産業とし、昭和30年頃までは約800人の人々が暮らしていましたが、平成26年4月現在の住民台帳では48人となっています。しかしながら、赤瓦の屋根に煙出しを設けた山村農家が今も多く残り、周辺の石積みや石造物、樹木、水路などと一体となって独特な歴史的景観を形成しており、平成23年（2011）に国の重要伝統的建造物群指定地区となりました。

地質

日本列島の歴史は、今から2～6億年前の古生代にさかのぼります。その後は浸食と堆積を繰り返していましたが、約1500万年前の新生代新第三紀中新世に大規模な火山活動があり、^{りゅうもんがん}流紋岩や^{ぎょうかいがん}凝灰岩といった岩石が堆積しました。その中の火山灰が堆積した緑色凝灰岩は、現在、広く建築材や墓石に利用されています。錦城山には新第三紀中新世に生



加佐ノ岬砂岩層

息していた貝やウニの化石が出ています。

橋立・黒崎および三木・三谷・山代地区周辺の丘陵の表層は、30万年前までの新生代更新世に堆積した砂礫や岩・森林土で構成されています。その後、1万年前の新生代完新世から続く海進海退の繰り返しにより、現在の海岸段丘、河岸段丘、平野が出来ました。海岸段丘の崖面では、^{たんせいこん}亜炭や^{あんざんがんかい}生痕化石（生物が残した足跡や糞）が出ます。

片野海岸の長者屋敷跡では、軽石凝灰岩が露出した台地および安山岩塊を間近に見ることができます。これらは海底火山の噴火による火砕流によるものと考えられます。

地層は普通、上に積もっているものが新しく、下へ行くほど古い地層になります。加賀市では大聖寺川や動橋川の上流にいくにしたがって古い地層が見られる特徴があります。日本で見られる一番古い飛騨変成岩の地層が九谷地区に局部的に見られるほか、上流から下流にかけてさまざまな地層を観察することができます。上流から、飛騨変成岩類・手取層群相当層・安山岩類・山中緑色凝灰岩層・桂谷凝灰岩砂岩層・河南凝灰質砂岩泥岩互層・曾宇凝灰質層・細坪泥岩層・花房凝灰質層・錦城山砂岩層・下福田凝灰質層・加佐ノ岬砂岩層・尼御前凝灰質互層などが分布し、その中には貝や植物、カニなどの化石を含むものもあります。たとえば河南凝灰質砂岩泥岩互層からは巻き貝の一種、ピカリアの化石が見つかることから、河南町は昔、亜熱帯のマングローブなどが生息する淡水と海水が混在した汽水の湿地だったことが分かります。このように化石からは、当時生きていた生物や環境、気候などを知ることができるの



ピカリア化石

です。

こうした地層からは、これまでにいくつかの鉱物資源が確認されています。

山中温泉生水町周辺の地層からは、黄銅鉱や方解石・石英など、さまざまな鉱物が出たとの記録があります。また、山中温泉の九谷・真砂など奥山一帯で磁器を焼くための陶石が採取され、同じく、片谷地区からは黒鉛が採取され鉛筆の芯の材料として利用された歴史があります。

このほか、深田町の加佐ノ岬砂岩層や宇谷町・水田丸町などの凝灰岩の地層からは、建築資材や墓石などに利用する石材が、美岬町の^{あまごぜん}尼御前近くからは^{ゆたかまち}亜炭が産出されています。

一方、橋立丘陵の広い範囲において砂鉄が確認されており、特に^{ゆたかまち}豊町や黒崎町・山田町などでは、古代、砂鉄を利用し鉄の生産が行なわれていたカナクソが点在しています。

気候

加賀市の気候は、日本海側気候の北陸型で、晩秋から冬にかけての曇天^{どんてん}と多雪に特徴があります。また、冬は季節風が強く、海岸^{しよくせい}の植生に大きな影響を与えています。

気温や降水量では、測量地点である「加賀菅谷」のここ30年間の平均気温は、およそ13.1度、年間降水量は3078.6mmとなっています。ほぼ同じ緯度^{いど}に位置している福島市の平均気温13.0度、年間降水量1166.0mmと比べますと、平均気温の違いはそれほどありませんが、年間を通しての降水量が2倍以上になっています。これは、11月から3月にかけての冬季の降水量に降雪分が含まれているためです。

日本海側が冬季に多雪になったのは、日本海に対馬海流^{つしまかいりゅう}が流れ込んできた約1万年前からです。シベリアや中国大陸からの乾燥した冷たい季節風が日本列島に向かって吹き込むとき、その風の中には、暖流である対馬海流の影響を受けて大量の水蒸気が含まれます。その風が高い山に当たって雪雲をつくり、大量の雪を降らせるのです。太平洋側の地域には雪を降らせた後の乾いた空気が山を越えて吹き降りていくので、太平洋側はよく晴れて空気が冷たく乾燥するのです。

このことが、そこで生活する人や動物・植物に大きな影響を与えており、人々の生活様式や動物の餌^{えさ}や行動範囲、植物の植生においても日本海側と太平洋側では違いが見られるのです。



雨の日が多い加賀市

動物

加賀市では海岸・湿地・湖沼^{こしょう}・水田・河川・丘陵地・山地と多様な環境があり、また十分開発されていない地域もあることから、動物相は豊富であるといえます。ここでは大きく山地・平地・海岸・湖沼に分けて特徴的な動物を中心に見ていきたいと思います。

山地の動物

豊富な森林資源がニホンツキノワグマ・ニホンカモシカなど大型の動物の生活を支えています。人里に近い山地にはニホンイノシシが生息しています。また、これまで確認されていなかったニホンジカが近年確認され、植生や林業^{けねん}などへの影響^{ほにゅうり}が懸念されています。小型中型の哺乳類としてはノウサギ・ホンドリス・ホンドキツネ・ホンドタヌキ・ホンドイタチ・ホンドテン・ニホンアナグマ・ネズミの仲間がいます。加賀市域にはニホンザルの群れはいないと思われませんが、時々はぐれたサルが出現します。鳥類ではヤマセミやフクロウの仲間がいます。両生類^{りょうせいるい}ではヒダサンショウウオやモリアオガエル、魚類ではイワナ・ヤマメが人間によって放流され生育しています。昆虫ではギフチョウ・ムカシトンボ・ムカシヤンマ・フジミドリシジミなどの珍しいチョウやトンボが見られます。また、国蝶^{こくちょう}として珍重されるオオムラサキが平成10年頃前には確認されましたが、それ以降は確認されていません。



ニホンイノシシ

平地の動物

人の生活の中心となる平野部では、人と動物とのかかわりが多く、人に危害をおよぼしたり田畑を荒らすなど、しばしばトラブルを起こします。平野部の大型哺乳類ではニホンイノシシが、小型中型哺乳類は山地部と同じように、ノウサギ・ホンドリス・ホンドキツネ・ホンドタヌキ・



電線にとまるカラスの群れ



アオサギ

ホンドイタチ・ホンドテン・ニホンアナグマ・ネズミの仲間がいます。鳥類では人家周辺にスズメ・ムクドリ・ツバメ・ハシブトガラス・ハシボソガラス・キジバトなどが繁殖^{はんしよく}しています。錦城山などにはアオサギ・ゴイサギ・コサギ・ダイサギ・チュウサギ・アマサギと、たくさんのサギ類が巣を作り繁殖^{はんしよく}しています。爬虫類^{はちゅうり}ではイシガメ・ニホンカナヘビ・シマヘビ・アオダイショウなどが確認

されています。^{りょうせいらい}両生類ではイモリ・ニホンアマガエルやアズマヒキガエルなどのカエルの仲間が見られます。魚類ではアユ・ウグイ・コイやドジョウ・ドンコなど多種類の魚が^{せいそく}生息しています。大聖寺川と動橋川は県下でも^{しすいせい}生息魚類数が多い川です。

昆虫では、加賀市にはため池が多いためかギンヤンマなどの止水性トンボが見られるという特徴があります。近年各地にビオトープが設置されていますが、こうした場所にやって来て増える可能性があります。ただし、バス・ギル・コイなどが放流されると幼虫が食われ、^{ほろ}滅びてしまう危険もあります。たとえば、大聖寺旧川では近年トンボの数が減少し、^{はんしよりよく}繁殖力の強いものだけが残るためか、見られる種が限られてきています。また、ため池周辺で見られるトンボの数も減ってきています。

また、ハッチョウトンボ・サラサヤンマ・ヒメアカネのように湿地などに生息するトンボが見られますが、これらの生息場所は特殊な環境であり、一時、^{はいでん}廃田の増加で増えましたが、宅地造成などの開発による乾陸化で減るというように、環境変化の影響を受けやすいものです。安定した環境が保障されない限り、すぐになくなってしまいう可能性があります。一方、チョウでは、キアゲハ・クロアゲハ・



ハッチョウトンボ
(加賀市片山津町城山付近にて)

アオスジアゲハ(以上、アゲハチョウ科)、モンキチョウ・モンシロチョウ・キチョウ(以上、シロチョウ科)、サトキマダラヒカゲ・ヤマキマダラヒカゲ・コムスジ・ミドリヒョウモン・タテハ・ルリタテハ・アカタテハ・ジャノメチョウ・イチモンジチョウ(以上、タテハチョウ科)、ヤマトシジミ・ルリシジミ(以上、シジミチョウ科)など多く見られます。

海岸部の動物

哺乳類では、ニホンアナグマやネズミの仲間が生息しています。鳥類ではシギやチドリ類、ウミウや海水性のカモ類、カモメが生活しています。爬虫類ではアカウミガメが漂着することがあります。魚類では海水魚が多数生息しています。

鹿島の森では、アカテガニ・クロベンケイガニ・ベンケイガニの3種のカニが生息しています。これらのカニは、いずれも、森の中に暮らす陸ガニです。アカテガニは乾燥した所でも適応し、また高いところに登る習性があり、木によじ登る姿を見ることができます。



アカテガニ

湖沼の動物

市内の湖沼には、冬季にカモ類が多く^{ひらい}飛来してきます。特に片野鴨池には天然記念物の

マガン・ヒシクイ・トモエガモなどが飛来し、水鳥の重要な生息地として、平成5年(1993)にラムサール条約の登録湿地となりました。また、絶滅危惧種ぜつめつ きぐしゆのトモエガモの国内最大の飛来地となっています。鴨池の核となっている「大池」の面積は1.5haときわめて小さな淡水湿地ですが、冬場は水張りをして、周囲を約3km、面積を10haに広げます。

鴨池にやってくる水鳥たちは、鴨池周辺の水田に落ち穂などを食べに行きます。特に、柴山潟の干拓地や大聖寺川流域に広がる水田は、昼はコハクチョウやガン類、夜はカモ類の重要な餌場えさばとなっています。また、湖沼に生息するカモ類は、オジロワシ・クマタカ・オオタカなど大型猛禽類もうきんるいの食物にもなっており、多様な鳥類相を支える役割も果たしています。また、昆虫では、各種のイトトンボ・シオヤトンボ・サナエトンボ・ウチワヤンマ・ヤブヤンマ・ギンヤンマ・コシアキトンボ・チョウトンボなど多くのトンボが見られます。



片野鴨池のトモエガモ

がいらい 外来動物

もともとはこの辺りにいなかったはずの生き物が人間の手により持ち込まれて増えています。外来生物は生態系や経済に重大な影響を与えることがあります。加賀市内にも外来生物は多く生息しています。哺乳類ではアライグマやハクビシン、鳥類ではドバト、爬虫類ではミシシippiaアカミミガメ、両生類ではウシガエル、魚類ではオオクチバス・ブルーギル・ライギョせっそくどうぶつ、節足動物ではアメリカザリガニ・シタベニハゴロモなどが、当市における外来種の代表的なものといえます。

植物

日本の植生は暖かい所から順にヤブツバキクラス域じょう（常緑広葉樹林帯りよく）、ブナクラス域かりよく（夏緑広葉樹林帯）、コケモートウヒクラス域（亜高山帯）、コマクサーイワツメクサ



ヤブツバキ



ブナ林

クラス域（高山帯）の4つに分けられます。当地で最も高い地点は大日山で1368mです。したがって加賀市には亜高山帯や高山帯はなく、ヤブツバキクラス域もしくはブナクラス域に所属します。

大まかに境界をもうけると、加賀市のほとんどがヤブツバキクラス域で、山中温泉の大土町や富士写ヶ岳より南側がブナクラス域に属します。また、加賀市では日本海側の

気候に適応した日本海側特有の植物が生えているのも大きな特徴です。

ヤブツバキクラス域



タブノキ

もし、人間がこの地上にいなかったらどのような森ができるでしょうか。それを示しているのが鹿島の森や橋立の出水神社、錦城山などの常緑広葉樹の自然林です。鹿島の森や出水神社の社叢は、「鎮守の森」として守られてきた歴史がありますし、錦城山は江戸時代においては入山が厳しく制限されてきた歴史があります。こうしたところは一年を通して、昼でも薄暗いタブノキやスダジイの林となっています。また、冬は比較的暖かく夏は涼しい、一年の間で気温の変化が少ない林です。常緑広葉樹林にはどんな木が生えているのでしょうか。ツバキの葉を思い描いてください。つやつや光る硬い葉、そして冬も落葉しない葉です。このような葉を持つタブノキ・スダジイ・ウラジロガシ・シロダモ・ヤブニッケイ・ヤブツバキなどの木で構成された林が常緑広葉樹林なのです。

人の手によって定期的に伐採され、管理されてきたクリ・コナラ・クヌギ・アベマキなどの雑木林（二次林）も広い面積を占めています。このような林がある場所を里山とよんでいます。加賀市の丘陵地の大部分はこのような里山になっています。また、モウソウチクやマダケ・メダケなどの竹林も多く見られます。

塩屋海岸から片野海岸にかけては保存状態のよい砂丘植生が見られます。ハマゴウ・イソスミレ・ハマヒルガオ・ハマボウフウ・コウボウムギなどが生え、昭和58年に昭和天皇もお立ち寄りになりました。

加賀市の海岸沿いには、先人の大変な努力によって作られたクロマツ林やニセアカシア林が広がり、ノハナシヨウブやススキ・ハマエンドウなど多くの植物が季節ごとに花を咲かせ、目を楽しませてくれます。全国的にマツ枯れが見られ、海岸の白砂青松の景観が失われつつあり、松林が徐々に常緑広葉樹林に変わっていている様子が見られます。



人が通る道などで繁殖するオオバコ

もし、人間がこの地上にいなかったらどのような森ができるでしょうか。それを示しているのが鹿島の森や橋立の出水神社、錦城山などの常緑広葉樹の自然林です。鹿島の森や出水神社の社叢は、「鎮守の森」として守られてきた歴史がありますし、錦城山は江戸時代においては入山が厳しく制限されてきた歴史があります。こうしたところは一年を通して、昼でも薄暗いタブノキやスダジイの林となっ



ハマヒルガオ

海岸の近くでありながらノハナシヨウブなどの湿地性の植物が多く見られるのは、地下の浅い部分に粘土層があり、水がしみ出している湿潤な土地だからです。

柴山湯や鴨池など、市内全域にたくさんの沼やため池があります。こうしたところにはヨシやウキヤガラの群落が見られます。また、アサザやコウホネ・ガガブタ・ヒメビシ・イトトリゲモなどの貴重な水生植物が見られる池が

多く残っています。

山地の谷筋から山の斜面にかけて、広い面積でスギ植林地が見られます。主にヤブツバキクラス域に見られますが、海拔 900m のブナクラス域にまで及んでいる区域もあります。

路上や市街地、農耕地周辺ではオオバコやクサイ・オヒシバ・タンポポなど、踏まれることに強い植物が見られます。また、セイタカアワダチソウやオオキンケイギク・オオアレチノギクなどの外来植物が多く見られます。

ブナクラス域

ブナクラス域はあまり人の立ち入らない地域ですが、昭和半ばまでは炭焼きをする人たちの仕事場でした。林は薪炭材を供給してくれる大切な林だったのです。また、加賀市における水源地にあたり、水の供給源であることは今も変わりません。永年積もった落ち葉がスポンジのように雨水を吸収し、安定して下流に水を供給してくれます。そのためブナ林は「天然のダム」と言われます。ブナクラス域



ホンシャクナゲ

の林の特徴は、ブナに代表されるように、春には葉を開き、秋に紅葉、落葉する木で構成された林です。ミズナラやイヌシデ・トチノキ・サワグルミなどの林も見られます。加賀市のブナクラス域の林の尾根筋の低木層には、ホンシャクナゲが見られます。特に富士写



カタクリ

ケ岳ではツツジの女王とよばれるシャクナゲが美しく、大型連休には登山者で賑わいます。地表にはカタクリやキクザキイチゲのような「スプリング・エフェメラル」とよばれる春植物が見られます。春植物は地表に陽光が届く時期に花や葉を広げ、地表が暗くなる夏には地上部が枯れて休眠に入ってしまう植物たちのことです。

大日山や富士写ケ岳に登ると大日山は麓から、富士写ケ岳は中腹からミズナラ林やブナ林になります。雪解け間もない山は明るくすき間だらけに見えますが、ブナやミズナラの葉が成長するとたちまちうす暗く、うっそうとした林になります。大聖寺川や動橋川の上流域ではトチノキやサワグルミの林が見られます。溪流釣りをする人は、このような林を遡っていきます。

がいらい 外来植物

外来植物は園芸として古くに持ち込まれたもの、あるいは近年の海外との交流の活発化によって種子などが荷物に付着して入り込んだものなどが多数あります。あげればきりはありませんが、オオキンケイギク・ブタナ・ハルジオン・ヒメジョオン・セイヨウ

タンポポ・トウネズミモチ・オオオナモミ・アメリカセンダングサ・ブタクサ・セイタカアワダチソウなどがその代表的なものといえるでしょう。



セイタカアワダチソウ

日本海側特有の植物

日本海側は積雪の多い地域で、植物もその気候に適応した生活形を獲得^{かくとく}して分化してきました。そのような植物の種類を「日本海要素」といいます。加賀市ではエゾユズリハ・ヒメアオキ・ハイイヌツゲ・オオバクロモジ・ツルシキミ・ハイイヌガヤ・タムシバ・エゾアジサイ・マルバマンサク・イワナシ・オオコメツツジ・オオバキスミレ・クロバナヒキオコシ・オオカニコウモリなど、たくさんの日本海要素を見ることができます。